

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2020年 夏号

第11巻第2号(通算30号)

2020年7月31日発行

AJEQ第12回全国大会はオンラインで開催

片山 幹生(早稲田大学)

次回、第12回日本ケベック学会全国大会は、ウェブ会議ソフトウェア ZOOM を利用してインターネット上で行われることになりました。2020年10月3日(土)と4日(日)の2日間、14時から開催される予定です。

第12回全国大会は、本来なら9月末に阪南大学あべのハルカスキャンパスで開催される予定でした。ところが新型コロナウイルス感染拡大により阪南大学の施設を全国大会会場として利用することが出来なくなってしまいました。阪南大学に限らず、他の大学等の施設でも外部団体に利用が開放される目処がたっていません。5月に行われた日本ケベック学会理事会で検討の結果、今年度の大会は ZOOM を利用したオンラインで行うことになりました。

ZOOM についてはすでに会議や大学の授業で利用されているかたは少なくないと思います。ZOOM のセキュリティ面を懸念す

る意見もありましたが、他の同種のウェブ会議ソフトウェアよりも広く利用されていて操作に慣れたかたが多いこと、動作が安定していることから、ZOOM が選択されました。

全国大会をオンラインで行うことが決定されるに伴い、予定されていた講演とシンポジウムのテーマも再検討されました。今年度の全国大会はケベックのパフォーミングアーツを特集することで準備が進められていて、この領域を専門とする何人かのかたにすでに登壇を依頼済みでした。しかしその後の新型コロナウイルス感染拡大のため、ケベックに限らず、世界中のあらゆる舞台芸術は現在、危機的状況に陥っています。そこで発表者の方々には、この状況を踏まえた上で、ケベックのアート、エンターテインメントの現状と今後の展望について語って頂くようあらたに依頼することになりました。

オンラインで行われる AJEQ 第12回全国

●本号の内容●

巻頭言(片山 幹生) …1

Je me souviens toujours du Québec! (橘木 芳徳) …3

冬のケベックと夏のケベック(西川 葉澄) …5

大会では、第 1 日目の 10 月 3 日 (土) に自由論題の発表を 3 本、第 2 日目の 10 月 4 日 (日) にケベックの現代アートシーンを巡る講演とシンポジウムを行う予定です。自由論題の発表はまだ決まっていますが、2 日目は「現代ケベックアートの挑戦と今後への課題 ～オリジナリティとグローバリズムの視点から～」をテーマに、まず最初に 2 年に一度、モンREALで開催される CINARS (Commerce international des arts de la scène、舞台芸術国際見本市) のディレクターのアラン・パレ氏のビデオメッセージを紹介する予定です。ついで西元まり氏 (フリーランス・ライター/大阪大学大学院) に「シルク・ドゥ・ソレイユを中心とするケベック発現代サーカスの現況」について講演して頂いたあと、曾田修司会員 (跡見学園女子大学) の総括と司会のもと、藤井慎太郎会員 (早稲田大学)、粕谷祐己会員 (金沢大学)、杉原賢彦会員 (目白大学) の 3 氏にケベックの舞台芸術、ポピュラー音楽、映画の現在について話して頂きます。発表のあとは、西元まり氏とスティーヴ・コルベユ会員 (聖心女子大学) をコメンテーターとして迎え、ZOOM での視聴者の皆様も交え、全体でのディスカッションの時間を設ける予定です。学会終了後にはオンライン上ですが、交流会も行うことができると考えております。

新型コロナウイルス感染拡大によって導入することになった全国大会のオンライン化ですが、今後、コロナ終息後も研究会や



ZOOM による AJEQ 大会のイメージ

学会などがオンラインで行われる機会は多くなっていくかもしれません。パソコンあるいはスマホの画面越しの交流ということでもどかしさや物足りなさはあるでしょうが、オンラインだからこそ、全国に散らばる会員やケベックに関心を持たれるかたの参加のハードルは低くなっている面もあると思います。オンラインでの全国大会は日本ケベック学会にとってはひとつのチャレンジです。このオンライン全国大会を遂行することで、日本ケベック学会がさらに開かれたものになることを実行委員として願っております。参加方法の詳細は 9 月のはじめごろにご連絡する予定です。想定外のトラブルなどでご迷惑をおかけするかもしれませんが、多くの方々のご参加をお待ちしております。(第 12 回全国大会実行委員)



＜リレー連載「ケベックと私」第 7 回＞

Je me souviens toujours du Québec!

橘木 芳徳 (暁星学園)

「橘木先生、モントリオール大学夏期研修に参加してみませんか、もし、お望みなら、招待してもらえようように州政府をお願いしてみますから」というありがたい提案をしてくださったのが、1998 年、当時、ケベック州在日事務所代表のジャン・ドリオン氏でした。フランスのマリア会宣教師により創立された暁星学園でフランス語教師をしていた私は、次第にフランス国以外のフランス語圏、就中、その代表的地域であるカナダのケベック州に興味を持ち始め、州政府在日事務所で当時文化担当官を務めていた天野僖巳さんとも連絡を取るようになりました。幸い、当時の州政府在日事務所は暁星学園から歩いて行ける千代田区麹町にありましたので、度々資料等をもらいに行きました。またドリオン代表を暁星にお招きし、フランス語選択者対象にケベックの地理・歴史・文化について講演してもらったこともありました。私がケベックの言語・文化に強い関心を抱いていることを察していただき、冒頭のドリオン代表のお誘いがあったのでしよう。

こうして私は 1998 年夏にモントリオール大学での研修会に参加しました。渡航費は自己負担でしたが、食費・宿泊費、滞在費、研修費等を全面支給していただきました。研修会は中南米のフランス語教師を対象に組織されていまして、メキシコ、

キューバ、ブラジル、アルゼンチン等の先生方とも親しくなりました。私の他にカリタス学園の山崎吉朗先生がケベック市のラヴァル大学での研修に参加しています。教授法の他にケベックの文化、諸制度に関する授業やグループ活動が面白く、大変実りある 3 週間の研修でした。またケベック州政府のフランス語教育普及への意欲的姿勢に、本国フランスに勝るとも劣らない熱意を感じ取りました。

Saint-Laurent 大河に抱かれ、ヨーロッパの古都を想起させる旧市街と、高層ビルが聳え立つ現代的なビジネス街がバランスよく構成され、文化、科学、芸術、スポーツ、演劇、そして IT 産業、商業、経済の中心地モントリオール市に魅せられ、その後、4 回に



写真 1 毎回、夏のひと月借りていたモントリオール・プラトー地区の家

わたり毎年 (2000 年夏はパリで開催された FIPF = Fédération Internationale des Professeurs de Français の第 10 回世界大会に参加後、大西洋を越えて)、モンリオール市を再訪しました。研修会以来今も親交を重ねている Didactique 担当の Christine Prévile 先生の紹介で、プラトーにある同じ家(写真 1)を毎回借りることができました。ジャズ・フェスティバルのコンサート会場はじめ、街中の隅から隅まで、地下鉄やバスを利用したり歩いて散策したりと夏のひと月を現地の友人たちと楽しく過ごしました。当時存在していたプロ野球チーム Les Expos の本拠地球場 Le Stade olympique、室内水族館 Biodôme、Pointe-à-Callière 考古歴史博物館、小高い丘 Mont Royal 公園をはじめ自然公園、世界各地から移住してきた住民の異国情緒溢れる各市場、Notre Dame de Montréal 大聖堂、Saint-Joseph 礼拝堂等、観光スポットや憩いの場所には事欠きません。また、雪に閉ざされた冬の市民生活を支えるべく機能的に構築された、地下街のショッピングセンターの賑わいを味わうため、2004 年初春のモンリオールも体験しました。この時は同市の友人の家に居候させてもらいました。

そして、ケベック市創設 400 周年記念の 2008 年、FIPF の第 12 回世界大会が同市で開催されましたので、満を持して 4 年ぶりにケベック州を再訪いたしました。ケベック学会現会長の立花先生や小松先生とも現地でお会いしました。嬉しいことにモン

リオール研修会で一緒だった南米の友人たちとも 8 年ぶりに (2000 年にパリで再会) 旧交を温めました。大会終了後、私は妻とケベックの大自然を肌で感じ取るため、現地友人の Madame Céline Gagne の車で約 1000 キロ、4 泊 5 日のガスペ半島一周旅行を敢行しました。途中、ペルセ (写真 2) では Madame の友人宅に泊めてもらい地元料理をごちそうにもなりました。脊椎動物の重要な化石が多く発見され、ユネスコ世界遺産に登録されているミグアシャ国立公園も見学しました。

2013 年から 4 年間、神戸の甲南大学で、「ケベックの歴史・文化」に関する講義も担当させていただきました。2014 年秋には、文化担当官の天野僖巳さんのご紹介と、大学の言語文化センター所長の中村典子先生のご協力もあり、ラスベガスでシルク・ドゥ・ソレイユの常設会場の総務兼財務部長を歴任され、その年、「OBO 大阪公演」を機に企画運営委員として来日されていた Claude Bourbonnière さんご夫妻を私の講義



写真 2 有名なペルセ岩を背景に

の一環としてお招きし講演してもらいました。カナダ・ケベック州の地理・歴史・文化に関心の薄かった学生たちには新鮮な発見だったようです。

2016 年、筑波大学名誉教授の宮尾尊弘先生が私の研究室に来られて、私のケベック州への強い想いを現地の人々に知ってもらうべく、また甲南大学と現地の大学との交流を本格的に始めるためにも、フランス語でメッセージを送ることにしましょうと、ビデオ収録してくださいました。おこがましくもここに 4 年前の YouTube 上の動画(7~8 分程度)を紹介させていただきます。時間の許すときにご覧いただけますと幸甚に存じます。

この紙面で言い尽くせないことを表情からお察しいただけるとありがたいです。

<https://youtu.be/S56RChcCv2c>



<リレー連載「ケベックと私」第 8 回>

冬のケベックと夏のケベック

西川 葉澄 (慶應義塾大学)

私が初めてケベック州はモンREALに行ったのは遠い昔、20 世紀の終わり頃のことである。ロートレアモン研究の著書を読んで勝手に師と仰いでいたミシェル・ピエルサンスが指導教授を引き受けてくれることになり、カナダ政府の奨学金を得てモンREAL大学の博士課程に登録した。ナント大

学の先生からも留学許可を得ていたが、当時全くお金のなかった私はあまり深く考えずに奨学金が受給できる方角に向かった。受給された片道の航空券を手に、モンREALで人生をやり直せるような気がしていた。

ケベックについては、フランス語圏で冬が寒いということ以外、予備知識ゼロの状態、フランス文学の研究をするために、かなり気軽にケベックに来てしまったのは後の祭りであった。来たばかりの頃は初めて聞くケベックのフランス語が全く別の言語に聞こえ、当時の旧式の DALF を制覇しフランス語が得意だと思い込んでいたのに、意思の疎通がうまくいかずのっけから心が折れた。やさぐれた反動で、英語圏の人と話してはほっとしていた。

それまでフランスのフランス語しか知らず、ケベコワの独特なイントネーションを受け入れる余裕もなく、ケベコワが苦手という気持ちだけが募った。大学の授業では、先生方はフランス風のアクセントで話すことが多く理解しやすかったが、学生の発言はもちろんケベコワであり、特に文化についてのゼミでは熱い議論に全くついて行けず辛い日が続いた。当時のケベックは独立の機運が高まっていたが、それについて予備知識がほとんどなく無知だったことも災いした。独立派の学生は、アイデンティティの一つとしてよりハードなケベコワで話していたように思う。そして、ケベックのフランス語は語彙もかなり異なり、例えば blé d'Inde (直訳すると「インドの麦」)を食

べますか?と聞かれて、鉄砲玉をくらった鳩のような顔をしていたらトウモロコシ (フランスでは *maïs*) のことだったり知らない言葉が多く、彼氏をチャム (*chum*)、つきあう彼女は髪がどんな色であれブロンド (*blonde*)、車はシャル (*char*) と言うなど、日常語レベルで語彙がかなり違っているのも嫌だった。また朝食が *déjeuner*、昼食は *dîner* とひとつずつずれることにもなかなか理解が追いつかず、イケメンの同級生から昼食を一緒に食べようと誘われて、夕食かと思いきや一喜一憂するなどしていた。

そして、ケベコワたちと話していて頻繁に聞こえる謎の音にも悩まされていた。例えば会話の合間に「ピ！」と聞こえる音は、滞在 10 ヶ月目頃にしてやっと *puis* (そして) だということがわかったり、会話の合間にしょっちゅう聞こえる「チ」という音が、挿入されるタイミング的に *tu sais* なのだとやっと気づいたのも 11 ヶ月目頃だった。そうした発見を家主のおばさんに報告すると、「今頃わかったの? *niaiseuse* ね」と言われた。ケベコワで「おばかさん」の意である。ケベックに関して様々なことを教えてくれたのが、この人だった。その名もケベックの代表的な名字のひとつであるトランブレさんという方で、大学図書館に直通のキャンパス入り口から 30 秒ほどのところにある家の各部屋を若者たちに間借りさせていた。大学のハウジングオフィスの人から冷遇されて、5 分でアパート探しは諦め、ターゲットを間借り物件に方向転換して最初に

コンタクトした人物だった。彼女とはなぜか最初から気が合い、ほぼ毎日夕食が無償提供されるようになった。二人でよく徒歩 10 分ほどの距離のスーパーに買い物をしに行ったり、彼女の若い頃の話の聞いたり、週末に一緒に外出したりして、私たちはたまに人々から母娘に間違われたりしていた。

このように過去をつらつら思い返すと、私の思い出の中のケベックは楽しいケベックと辛いケベックの二つに分断されているようだ。わかりやすくいうと冬のケベックと夏のケベックである。冬は過酷でいつ終わるのか見当もつかず、4 月まで雪のため道路がぬかるんでいた。横断歩道を渡る時、歩道から薄汚れた雪の塊に足を乗せると、硬い雪と見えた部分も実は中が溶けていてブーツがズボッと氷水に沈む。わかっても何度もやってしまう。大学院の授業は 1 コマ 3 時間と長く、1 限が始まる 8 時頃はまだ真夜中のようなだった。授業が終わってちょっと寄り道すると、帰る頃には雪嵐によるホワイトアウトが起きていて、ちょっ



メトロの Square Victoria 駅



外階段のついた典型的なモンリアルの住宅

と寄り道すると、帰る頃には雪嵐によるホワイトアウトが起きていて、普通なら 10 分で帰れる道で遭難しそうになった。大学図書館からは眼下に広がるモン＝ロワイヤル公園に隣接する真っ白な雪で覆われた広大な墓地を眺めて孤独に勉強ばかりしていた。

5 月になると急激に夏が来て、モンリアルの人たちは薄着になって弾けるように外出し、生きる喜び(joie de vivre)の言葉のままに人生を謳歌し、街は毎週催される様々なフェスティバルで賑わい、私も勉強しかなかった冬の埋め合わせをするようにケベックの夏を堪能した。友人になるとケベコワたちは親切で、様々な人がいろいろな場所に連れ出してくれた。モンリアル万博会場跡地の人工島に建てられた遊園地ラ・ロンドやカジノに行き、田舎にあるカバナシュークル(cabane à sucre)でメープルシロップのかかった料理を食べ、湖でカヌー、ピクニック、様々なパーティー、7 月 1 日の引越し、毎週末の花火、車で映画を見るドライブインシアターなど、モンリアル時代

の自分は現在日本で生きている自分とは人格が明らかに異なっている。

そんなケベック生活だったが、1 年後にはモンリアル大学との交換留学でパリ郊外の ENS サンクルー／フォントネー校に送り出してもらった。ケベック文学を専攻する学生が多く、フランス留学に興味を示す者が私以外いなかったからなのだが、このような寛大な措置や、人々の適当さが大変心地よかった。ケベックは今もまだ私にとって非常に興味深い場所であり続けている。

●編集後記●

ニュースレター夏号をお届けします。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、日本ケベック学会でもオンライン大会を試みることにになりました。そこで今号では、大会実行委員として尽力いただいている片山会員にオンライン大会への誘いをお寄せいただきました。加えて今号では、25 号以来途絶えていたリレー連載「ケベックと私」を 2 編ご寄稿いただくことができました。お二人のエッセイから、ケベックのモノトーンの冬と輝く夏のコントラストが目につかびます。

長く続く大規模な工事とコロナ禍で、Sainte-Catherine 通りを中心とするモントリオールの都心部で商店や飲食店が苦境にあえぐ様子がメディアをにぎわせており、コロナ後の風景が気になります。この秋は ZOOM で！ (T)

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎